若越郷土研究
6の6

特集・郷土研究入門講座

総説

杉原丈夫

○研究とは何か。

研究とは、新しい学説を述べるか、或は新しい事実を報告するか、とにかくまだ他の人によつて知られていないことを調べて発表することである。従つて研究には何らかの独創性や新奇性がある。世間では、先輩の著述を読んで勉強することを研究と称している人もあるが、その程度では単なる学習であつて研究ではない。学界では、研究と単なる学習とは厳密に区別される。

例えば郷土の伝説に興味を持つ人が、既刊の郡誌や村誌に書いてあることをそのまま写して報告しても、研究とはいわれない。まだ誰によつても報告されていない伝説を自分の足と耳で集めて来たとき、それは研究である。同様にして、誰かが前に述べている意見と同じことを自分の論文に書いても、それは模倣または盗用であつて、研究者の恥となる。他の人が既に発表していることを知らないで、同じことを書いた場合は、盗用ではないが、やはり学者としては不注意であり、そのような論文は新しい研究としては取扱われない。

ラジオの地方番組を聞いていると、時折明らかに他人の著述を無断借用している人がある。これなどは著作権侵害で、研究者の徳義に反する。他人の苦心の研究を自分の知識のような顔で放送したり、物に書いたりしてはいけない。

もちろん自分の研究の必要上他人の研究を利用せねばならないことは少くない。その場合は資料の出所を明らかにして引用すべきである。これが学界の常識であり、研究上の先輩や同僚に対する礼儀である。郷土研究家と自称する人の中には、この程度の道徳を知らぬ人があるのは嘆かわしい。

○研究論文にはどんな種類があるか。

広い意味で論文と称されているものには、論考と資料とかある。論考は狭義の論文のことであつて、種々の資料を基礎にして、自分の学説を述べるものである。従つて同じ資料に基づきながら対立する二つの学説が生ずることもありうる。論考の資料は、文末に参照文献として列挙される。重要でかつ短いものは直接本文中に引用されることもある。

報告とは自分が調査した事実を詳細に述べることである。だからこれはなるべく正確にかつ客観的に述べられることが望ましい。物によつては写真、地図、統計表などがつく。県教育委員会発行の「文化財調査報告」がそのよい例である。

研究者の中には、自分の調査事項と一しよに、既に他の人が報告したことを再録している人がある。一つの報告の中に辞書的に多数集めてあることは便利なこともあるが、他の著述に出ていることをまた読まされるのは無駄である。このようなものは、もちろん研究とはいわれない。

○文献作業は必要である。

さて何かある問題について研究しようと決心したときは、先ず最初に文献作業が必要である。その問題について既にどれだけの研究がなされているか調べることである。学者はそれぞれ自分の専門領域において文献収集に非常な苦心をしている。本誌の会員は必しも専門的学者ではないから、あまり苦労をする時間的余裕はないであろうが、それでもある程度の努力を怠つていけない。

文献作業はなぜ必要であるか。他人が既に研究してしまつていることを、自分がまた金と時間をかけて同じ研究をくり返すのは無駄である。それに先輩が研究してくれたことを足場にして、更にそれよりも深い研究をすることが能率的でもあり、かつは学問進歩の常道である。時には既にすぐれた資料や学説が発表されているのに、それを知らずして見当違いの論考を述べて恥をかくこともあろう。

私はひとの論文を読むとき、文末の参照文献に注目する。その問題につき当然読むべき文献も読んでいないようでは、論文としてだいたい失格である。郷土研究家として県下で有名な人の書いたものにも、文献作業のすこぶるお粗末なのがある。その人の研究不足がわかる。

研究に必要な文献の調査や収集はふだんから心がけておらねばならない。初心の人はさしあたり「福井県郷土研究書目」を見るがよい。県立図書館発行で、私が編集したものである。約七千点の文献が収載されている。まだ不十分であるが、一応これを基礎にして、これに洩れているものやその後出版されているものを補充すればよい。

文献があることがわかつても、それを実際に入手して読むことはかなり困難である。しかし最近は写真複製の技術が発達したため、文献収集が比較的容易になつた。遠隔地の大学や図書館にある文献はフィルムに写して送つてもらえる。もつとも多少金はかかるが、研究にある程度の経費がいるのは仕方ない。

○何を研究すべきか。

趣味として郷土研究をする場合、二つの方法がある。一つは、地域を自分の居住する市町村とか、学問的に興味のある特定地区とかに限定して、その地域内のことを何でも一通り調べるやり方である。この場合は、地域に対する愛郷心やその地域内に居住している便利さが相まつて相当効果をあげうる。しかし時としては視野が狭く、郷土自慢となるおそれもある。

いま一つは、考古学とか民俗学とか、領域を限定して、全県下的に研究することである。これは更に研究領域を限定して、例えば百姓一揆だけとか、橋本左内だけとか、民俗芸能だけとかにすれば、ずつと専門化され、県外の同好者と連絡して全国的視野で研究を楽しむこともできる。

我々はそれぞれ本業があつて忙しいのであるから、あれもこれもに手をつけるよりも、研究地域をうんと狭くするか、研究問題を思い切つて特殊化する方がよいのではなかろうか。そうすればアマチュア研究でも、学問的には相当質の高いものができよう。